

件数の経年変化は、1900年から1940年代までは年間数件（1件とは1度に10ヶ所以上の崖ぐずれ）であったのが、1950年に300件以上と急増し、以後多発傾向が続いていることを示した。

討論：この事実が、瀬戸内沿岸のかなりの地域に共通していることに触れたことに対する問題と、社会環境の変化に関連したとする見方に対する1950年代以前、以後の違いが何かに議論が集中した。

#### 5. 島根県の大雨災害について

松江地方気象台 粕谷 光雄

島根県の大雨のほとんどが、前線南下に伴うものと台風によるものとに分け、特に、大雨による災害が山・崖ぐずれ等の多いこと、そして、7月20日前（一部後）に集中していること、前線性降雨が一過性の強雨で明け方から早朝に多いことにつき、39年7月18～19日の詳細な解析例が、エコー分布、総観解析を含めて示された。

討論：山陰豪雨の特性に対する普遍的原因の問題と、それに対するエコーの利用方法につき、広島レーダ資料も提出されてかなり基本的な部分にまで議論がなされた。（根山芳晴）

## 気象集誌の論文要旨の掲載にあたって

“天気”では、従来から“気象集誌”の目次を掲載して参りました。しかし、会員の中から、目次だけではなく要旨も掲載してほしいという要望が聞かれたのに加え、気象集誌編集委員会からも同様の要請を受けました。

“気象集誌”は、気象学会を代表する学術雑誌であり国際的にもその評価が定着しつつありますが、しかし、一方では、学会員にとって必ずしも親しみやすい内容であるとも限らないこともあります。そこで、学会員にもっと“集誌”の内容を知っていただくために、“天気”に、その論文要旨を合わせて掲載してゆくことにしました。さらに、集誌編集委員会からのアナウンスメントやコメントも適宜収録し、学会員との交流をもっと良くしてゆく予定です。

なお、両誌の編集事務上の都合で、発行が時間的に前後することがありますので、その点あらかじめ御了承をお願い致します。（天気編集委員会）

### 日本気象学会誌 気象集誌

第 II 輯 第56巻 第1号 1978年2月

松田佳久・松野太郎：金星大気の輻射対流平衡

A. J. Dyer・J. R. Garratt：不安定境界層内における乱流フラックスの高度およびフェッチによる変化

内藤玄一：外洋上の観測塔における運動量と顕熱フラックスの直接測定

塩谷正雄・岩谷祥美・黒羽因夫：強風時の鉛直風速の大きさと水平相関

上田 博・菊地勝弘：単結晶氷で凍結させた適冷却水滴の凍結実験

#### 要報と質疑

望月 定：早春に於ける八丈島と三宅島の自然放射能の比較

児島 紘・関川俊男：冬の季節風下での海洋大気上エアロゾルの陸地の影響

鈴木 茂・旭 満：ラジオゾンデのつりひもの長さの変化における日射の気温測定に及ぼす影響